

・白選五十一首・



奥村晃作

おくむら・こうさく 1936年、長野県生まれ。東京大学経済学部卒。宮柁二に師事。「コスモス」選者。「棧橋」発行人。ネット上に個人誌「奥村晃作短歌ワールド」を運営し、日々更新。歌三昧の暮らしをしている。最新刊は現代短歌文庫『奥村晃作歌集』（砂子屋書房）。

くろがねに光れる胸の厚くして鏡の中のわれを憎めり

一本のクレヨンに裸婦描かれてぬくもりゐたり褐色の肌は

水中に首を沈めて白鳥は黄なる嘴ぐいぐい動かす

ラッシュアワー終りし駅のホームにて黄なる丸葉踏まれずにある

突風にさらはれしわがたましひがもどりし宵は口ずさみをり

わが子さへ蟹の甲羅にひそむごととほき想ひぞ人込みを行く

蹠あしうらを土に下せばおびえ泣く子を抱き上げて公園にをり

どれからといふわけでなく次々に石を離れて雀舞ひ立つ

鳴き声は上げぬものかな浅蜩をば熱き味噌汁にどどと落せり

山間の小学校は休暇にて地球儀ひとつ教卓を占む

腹筋を鍛へむと脚を持ち上げて仰ぐ夕空鴉がよぎる

『三齡幼虫』

〈ポスト戦後短歌〉たるところの塚本那雄創出のいわゆる〈前衛短歌〉は近代短歌史上に画期的な役割を果たしたが、最早その先端性は失われ、歴史的役割は完了している。喩ゆと句法（句跨りまたがなど）が浸透し、一般化しているのが何よりの証拠である。

代わって短歌の先端は〈表記のレトリック〉にある、と言うのがわたしの短歌観である。このことを考えるようになったのはほんの近年のことだが、作品の実践は二十年前さかのぼに遡る。はからずも大岡信おおののぶさんがその事を知らせてくれたのである。大岡さんは立て続けに二回、奥村の「ただごと歌」を朝日新聞連載の「折々のうた」に採り上げられ、わたしに示唆を与えたのであった。

四十を超えて牛の如き肉体を夕べの路地に走らせてをり

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな前を向く

もし豚をかくの如くに詰め込みて電車走らば非難起こるべし

フラミンゴ一本の脚で佇ちてをり一本の脚は腹に埋めて

現はれし水が落ち行く岩角に当りて生絹の水が落ち行く

舟虫の無数の足が一斉にうごきて舟虫のからだを運ぶ

ヤクルトのプラスチックの容器ゆる水にまじらず海面を行くか

少年が引き連れて冬の夜の空の星を見に行く家族四人で

真面目過ぎる「過ぎる」部分が駄目ならむ真面目自体はそれで佳しとして

掌を滑りタイルを打ちて己れ跳び身を隠したり固き石鱗

不思議なり千の音符のただ一つ弾きちがへてもへんな音がす

これ以上平たくなれぬ吸殻が駅の階段になほ踏まれをり

歩かうとわが言ひ妻はバスと言ひ子が歩かうと言ひて歩き出す

お先にと黙つて一枚の花びらが落ちて行くなり桜満開

然ういへば今年はぶだう食はなんだくだものを食ふひまはなかつた

ボールペンはミツビシがよくミツビシのボールペン買ひに文具店に行く

梅の木を梅と名付けし人ありてうたがはず誰も梅の木と見る

オリーブの樹が動き畑の土動き画面全体が動くゴッホの絵

さんさんに踏まれて平たき吸殻が路上に在りてわれも踏みたり

運転手一人の判断でバスはいま追越車線に入りて行くなり

「鬱と空

「鴉色の足

「父さんのうた

以下、ネット上に運営する個人誌の「日記」
（昨年九月二十七日）からの引用を行う。

《二日前の「折々のうた」に大岡信さんが、拙作をお取り上げくださったが、今に思うことがある。今まで誰も注目しなかった歌をとつぜん大岡さんは「ただごと歌」の範例として推された。いつの歌か思い出せず、調べたところ二十二年前の一九八二年の作品であり、第三歌集「鴉色の足」所収のものである事が確認できた。（略）大岡さんは一首について次のように記された。「作者は自作を、芸を凝らして修辭にふけるコトバ派歌人と対立する直言歌派であると言ふ（以下略す）」。

奥村の歌に芸がないかと言えば、むしろ芸は、レトリックはある。それは「表記のレトリック」であり、数年来わたしの唱えている先端の表現の問題である。（略）その実践が二十二年も前に既に行われていたのであった。まず作品、論はその後を追う。大岡さんが引いて下された歌を次に記す。

「顔中に毛の生える犬をカワイイと幼言ふ
ああそのしんじつの声」。

蛇足になるが、「カワイイ」の片仮名使用、「しんじつ」の平仮名使用、「をさな」のルビ使用、そして旧仮名使用（言ふ）すらもが表
現上・表記上の工夫であり、レトリックである。〉

咲き満つる桜の花を保たせんと東京は甕^{かめ}の底冷えつつく

大根^{だいこん}が身を乗り出してうまさうな肩から胸までを土の上に晒^{さら}す

結局は傘は傘にて傘以上の傘はいまだに発明されず

犬ワンワン猫ニャーゴニャーゴと聴くとして人間の声は何と聴くべしや

轆^ひかると見えしわが影自動車^{自動車}の車体に窓に立ち上がりたり

一般に犬はワンワン叫ぶから普通名詞でワンちゃんと呼ぶ

春花の真打ちとして出を待てる如くなかなか咲かない桜

睡蓮の葉はなまけもの水面にひつたりと青き己れを伸べて

ザトベック・アベベ・円谷^{つぶらや}いまは亡く老いたるわれは地^ちの上走る

いろいろの工夫の花火見たけれど打ち上げ花火はまん丸がいい

「蟻^{かみ}ん子とガリバー」

「都市空間」

「男の眼」

「ピシリと決まる」

どこまでが空かと思ひ 結局は 地上スレスレまで空である

われはもや「わが歌」得たりひとみな得がたくあらん「わが歌」得たり

権^{ごん}太坂^{たさか}完全舗装されたれどその道の持つ傾斜変わらず

太陽を見つめることは出来ないが赤い夕日は見つめて居れる

接近し まごうことなき旅客機がビルの胸部に激突したり

オイ、キミら冗談^{冗談}じゃないぜ〈戦争〉が肯定されてタマルモンカよ

支持率が八割超えて伸びる時かつても今もキケンの水位

どこなりとバクダン身に付け飛んで行け ネズミはネズミ数で勝負だ

笑ってやれせめてブッシュをアメリカを対イラク戦を笑ってやれ

「キケンの水位」